

いわき四藩のお殿様

— 平・泉・湯長谷・窪田藩、藩主の変遷 —



会期 平成26年 6月21日(土) ~ 9月28日(日)
 時間 10:00~21:00 (日曜・休日 10:00~18:00)
 休館日 毎月 最終月曜日
 会場 いわき総合図書館 5階 企画展示コーナー

— 目次 —

- ◇ いわき四藩のお殿様(歴代藩主) …… 1
- ◇ いわき四藩の概観 …… 2
- ◇ いわきのお殿様の変遷 …… 6
- ◇ 藩主一覧(年齢、就任・退任・在任年数) …… 8
- ◇ 藩主の家(内藤家・安藤家・本多家・土方家) …… 10
- ◇ 関連(参考)資料 …… 14

いわき四藩のお殿様(歴代藩主)

たいら 平藩				いずみ 泉藩				ゆながや 湯長谷藩				くぼた 窪田藩主			
代	姓	名	家代	代	姓	名	家代	代	姓	名	家代	代	姓	名	家代
1	とりい	ただまさ	一	1	ないとう	まさはる	一	1	とよやま	まさすけ	一	1	ひじかた	かつしげ	一
	鳥居	忠政			内藤	政晴			遠山	政亮			土方	雄重	
2	ないとう	まさなが	一	2		まさちか	二	2		まさのり	二	2		かつづく	二
	内藤	政長				政親				政徳				雄次	
3		ただおき	二	3		まさもり	三	3	ないとう	まささだ	三	3		かつたか	三
		忠興				政森			内藤	政貞				雄隆	
4		よしむね	三	4	いたくら	しげあつ	一	4		まさあつ	四				
		義概			板倉	重同				政醇					
5		よしたか	四	5		かつきよ	二	5		まさのぶ	五				
		義孝				勝清				政業					
6		よししげ	五	6	ほんだ	ただゆき	一	6		さだよし	六				
		義稠			本多	忠如				貞幹					
7		まさき	六	7		ただかず	二	7		まさひろ	七				
		政樹				忠籌				政広					
8	いのうえ	まさつね	一	8		ただしげ	三	8		まさゆき	八				
	井上	正経				忠誠				政徧					
9	あんどう	のぶひら	一	9		ただとも	四	9		まさあきら	九				
	安藤	信成				忠知				政環					
10		のぶよ	二	10		ただのり	五	10		まさたみ	十				
		信馨				忠徳				政民					
11		のぶよし	三	11		ただとし	六	11		まさつね	十一				
		信義				忠紀				政恒					
12		のぶより	四	12		ただのぶ	七	12		まさとし	十二				
		信由				忠伸				政敏					
13		のぶまさ	五					13		まさやす	十三				
		信正								政養					
14		のぶたみ	六					14		まさのり	十四				
		信民								政憲					
15		のぶたけ	七												
		信勇													

いわき四藩(平・泉・湯長谷・窪田藩)の概観

平 藩 (磐城平藩、磐城・岩城藩) 譜代

藩庁・福島県いわき市平

いわき地方は15世紀中頃から岩城氏が領し、岩城常隆は天正18年(1590)、豊臣秀吉からこの地方の所領を安堵された。あとを継いだ水戸城主佐竹家からの養嗣子・貞隆(能化丸)は、徳川家康の上杉討伐に参陣せず慶長7年(1602)に改易されたが、後の元和2年(1616)、信濃国川中島に1万石を与えられた。



伏見城で戦死した鳥居元忠(忠政の父)の墓がある長源寺

岩城氏が改易され、下総国矢作から鳥居忠政が10万石で入封した。さらに慶長10年(1605)に2万石を加増

された。鳥居氏は三河以来の譜代の重臣で、忠政の父元忠は、関ヶ原の戦いのとき伏見城で石田三成と戦って討死した。忠政は入部と同時に新城を築き城下町を建設する一方、領内の検地を実施するなど領国支配体制を整備し、元和8年(1622)に出羽国山形20万石へ移封となった。



平城の築城で人柱伝説が残る丹後沢

代わって、上総国佐貫より内藤政長が7万石で就封した。その子忠興も2万石を与えられた(父子で9万石)。

寛永11年(1634)忠興が平藩主となり、忠興が領していた2万石を弟政晴に与えて泉藩が成った。忠興は領内総検地を実施し、村数145、総石高は8万8千石余となった。また、夏井川の水を引いて約30キロにわたる用水路「小川江」を設けて新田開発を行い、寛文6年(1666)には2万石の新田を得た。明暦3年(1657)には、家臣の地方知行制を廃して蔵米渡し(禄米制)にするなど、藩体制を整備した。



平城の本丸跡、赤目崎物見ヶ岡

寛文10年(1670)義概が藩主となり、弟政亮に新田分1万石を分知して湯長谷藩を創出した。義概は新参の家老松賀族之助に藩政を委たため、延宝8年(1680)、藩主の側近どうしが争い「小姓騒動」が起きた。その後、義孝、

義稠が続き、政樹の時には凶作にもかかわらず日光参宮本役、渡良瀬川改修普請手伝い、焼失した江戸藩邸普請などでの過酷な増税で農民は困窮し、元文3年(1738)、全藩にわたる一揆が起こった。延享4年(1747)、政樹は日向国延岡七万石に移封となった。

次に井上正経が常陸国笠間から入封した。城付 57 ヲ村、2 万 3 千石、陸奥国伊達郡内 3 万石、常陸国多賀郡内 7 千石、合わせて 6 万石を領した。宝暦 6 年(1756)、大坂城代に任ぜられ畿内へ移封した。

次いで美濃国加納から入部した安藤信成は城付 2 万 3 千石、伊達郡内 2 万 7 千石、合わせて 5 万石を領した。信成は寺社奉行・若年寄を歴任し寛政 5 年(1793)に老中となり、その治政 54 年間。その子信馨は産児制限の矯正につとめて領内人口の増加をはかり、信義、信由が続いた。

弘化 4 年(1847)に藩主となった信正は、寺社奉行、若年寄を経て、万延元年(1860)に老中となり外国事務専掌を命ぜられた。大老井伊直弼が桜田門外にたおれると、幕閣の中心となり諸外国との交渉、和宮降嫁などの公武合体策に対処した。文久元年(1861)、陸奥国菊多・磐前両郡内 1 万石を美濃・三河・遠江内の 1 万 7 千石と引替えられた。翌年、坂下門外で負傷した信正は在職中の失政を理由に 2 万石減封され、隠居・永蟄居を命じられた。これを継いだ長男信民は 4 歳で夭折。



安藤家の菩提寺・良善寺(旧善昌寺)



銃弾による穴が残る山門(良善寺)



良善寺の安藤家墓所(左)、その奥には戊辰戦争で亡くなった平藩士の墓が並ぶ(右)

その後を信濃国岩村田藩主内藤正誠の弟・信勇が継ぐ。慶応 4 年(1868)の戊辰戦争の時、信勇は病のため美濃に滞在。隠居の信正が磐城平で奥羽越列藩同盟に参加したが、奥羽征討軍の攻撃をうけて平城は落城した。

明治元年(1868)、安藤家は陸中国磐井郡 3 万 4 千石(岩手県一関付近)に転封を命じられたが、信勇が歎願し 7 万両の献金をして磐城平で廃藩置県をむかえた。

泉 藩 譜代

藩方＝福島県いわき市泉町四丁目

上総国佐貫藩主内藤政長が元和8年(1622)、平藩に移封し、佐貫領内に1万石を領していた嫡男忠興も1万石を加増されて2万石を有していた。寛永11年(1634)忠興が平藩主になると、忠興が領していた泉2万石は弟政晴に与えられた。2代目政親が50年間継ぎ、その子政森は元禄15年(1702)上野国安中へ転封となった。

安中から板倉重同が1万5千石で入封する。重同の子勝清は延享3年(1746)、遠江国相良へ移封となった。

相良から本多忠如が入封し、その子忠籌は老中松平定信に抜擢され、若年寄、側用人を経て老中格となり「寛政の改革」に参画し、5千石を加増された。ついで忠誠、忠知、忠徳と続き、次の忠紀は奥羽越列藩同盟に加わり、奥羽征討軍の攻撃を受け、2千石を減封され忠伸の時に廃藩置県となった。



泉西公園の「泉城址」の碑



泉城から移された泉町の吉田家の門



JR泉駅前に建つ「奥州泉藩城下町」の碑

湯長谷藩 譜代

藩方＝福島県いわき市常磐

平藩主内藤忠興は寛文10年(1670)、三男の遠山政亮に平藩領の磐前・菊多二郡内の新田1万石を分与し、湯本に陣屋を構えて立藩した。のち延宝4年(1676)陣屋を湯長谷へ移築した。

政亮は天和元年(1681)大番頭に就任して丹波国内に2千石、さらに貞享4年(1687)大坂定番に昇進し河内国内に3千石を加増されて、1万5千石を領有した。

平藩内藤家は、延享4年(1747)日向国延岡へ移封となったが、湯長谷藩は一度の移封もなく幕末まで存続した。



磐崎中学校内に立つ「湯長谷藩館址」の碑

政亮のあと、養子政徳、次の土方雄隆(窪田藩主)の甥・政貞は姓を内藤氏に復し、以後、政醇、政業、貞幹、政広、政偏、政環、政民、政恒と続く。次の政敏の時に領内白水村から石炭が産出し、文久3年(1863)には2万6千俵を採掘した。慶応4年(1868)5月、政養が奥羽越列藩同盟に参加して1千石を減封され、政憲の時に廃藩置県となった。政亮以来14代その多くが養子家督であった。



湯長谷藩主内藤政醇・政養の墓所がある龍勝寺



城下町の風情が残る常磐下湯長谷町

窪田藩(菊多藩) 外様

藩庁＝福島県いわき市勿来町窪田

加賀国野々市藩1万5千石の藩主であった土方雄重は元和8年(1622)、下総国田子(千葉県多古町)5千石の所替えとして、陸奥国菊多郡窪田に1万石が与えられ、能登国内(石川県)1万石と合わせ2万石で入部した。平藩主となった内藤政長の娘婿で、内藤家とともに磐城地方への入封となった。

2代藩主雄次は、五箇村用水や酒井用水を造営して新田開発を行なった。泉藩内の錦御宝殿熊野神社若宮や長床の修理、土方家菩提寺大高寺の修築などを行い、その治政は50年となった。

延宝7年(1679)、長男雄信は病弱のため嫡を辞し、次男雄隆が家督を相続した。その内の2千石を弟雄賀に分与し1万8千石となる。

天和3年(1683)、雄隆に嗣子がなく他家の養子となっていた弟貞辰を仮養子としたが、国許の家臣たちの反対にあい兄雄信の子内匠を養子と改める。

翌年6月、憤激した貞辰が大目付に訴え、同7月、雄隆は「家政紊乱の廉」により領地没収、諸役召し上げとなり、越後国村上藩主榊原政邦家に永謹慎を命じられた。

窪田藩は3代62年で廃藩となった。その所領は幕府直轄領となり、窪田代官所が創設された。



しとがわ 四時川の五箇村用水堰(川部町)

いわきのお殿様さまの変遷 —平藩・泉藩・湯長谷藩・窪田藩—

1602 (慶長2) ~ 1755 (宝暦5)

年	平藩主	泉藩主	湯長谷藩主	窪田藩主
西暦 元号 年	代 姓名 等	代 姓名 等	代 姓名 等	代 姓名 等
1602 慶長 7	1 鳥居 忠政 ただまさ			
	いわき市と檜葉の一部を領有 下総国矢作(4万石)→磐城(10万⇒12万石)→出羽国山形(20万石) 平城築城			
1622 元和 8	2 内藤 政長 まさなが 上総国佐貫→平 父/内藤政長(7万石) 子/内藤忠興 (菊多郡2万石)			1 土方 雄重 かつしげ 下総国田子→窪田 (2万石) 平藩主内藤 政長女婿 ・ 小姓
1629 寛永 6				2 土方 雄次 かつつぐ 平藩主内藤忠興女婿
1634 寛永 11	3 内藤 忠興 ただおき 忠長	1 内藤 政晴 まさはる 平藩内藤政長4男・ 忠興弟 (2万石)		
1645 正保 2	・大阪城代	2 内藤 政親 まさちか ・奏者番 ・若年寄		
1670 寛文 10	4 内藤 義概 よしむね 義泰・風虎		1 遠山 政亮 まさすけ (内藤) 頼直 (1万⇒1万5千石) 平藩2代内藤忠興3男 平藩3代内藤義概弟 ・大番頭 ・大坂定番	
1679 延宝 7				3 土方 雄隆 かつたか 2代雄次次男・兄雄 信(かつのぶ) ■1684.7.22 土方家御家断絶→ 幕府直轄窪田陣屋 (代官・柘植伝兵衛政 宗)
1684 貞享 1	1678/江戸藩邸類焼 1679/浅香騒動 1680/御小姓騒動			
1685 貞享 2	5 内藤 義孝 よしたか			
1694 元禄 7	3代義概3男、義英 (露沾)弟		2 遠山 政徳 まさのり 堀主計頭直行次男	
1696 元禄 9	1688/窪田領1万石の 代行検地	3 内藤 政森 まさもり 小姓		
1702 元禄 15		4 板倉 重同 しげあつ		
1703 元禄 16		内藤家→上野国安中 →板倉家(1万5千石) 神保主膳元茂次男	3 内藤 政貞 まささだ 土方民部雄賀次男 窪田藩3代土方雄隆 甥 ・大坂青屋口加番	
1712 正徳 2	6 内藤 義稠 よししげ			
1717 享保 2	4代義孝次男	5 板倉 勝清 かつきよ 重清		
1718 享保 3	7 内藤 政樹 まさき			
1722 享保 7	義英長男・4代義孝 甥	・奏者番 ・寺社奉行 ・若年寄	4 内藤 政醇 まさあつ ・江戸馬場先門番	
1728 享保 13	1738/元文3年の惣一 揆起こる			■湯長谷藩(政醇)は平 藩の元文3年の一揆に平 藩の家臣たちへ米100俵 を送る
1741 寛保 1		泉→遠江国相良	5 内藤 政業 まさのぶ	
1746 延享 3	平→日向国延岡	6 本多 忠如 ただゆき		
1747 延享 4	8 井上 正経 まさつね 常陸国笠間→平(6万石) →大坂城代(摂津等) ・奏者番 ・寺社奉行	遠江国相良→泉(1万5 千石)		
1754 宝暦 4		7 本多 忠籌 ただかず		

1756 (宝暦6) ~ 1871 (明治4・廃藩置県)

年	平藩主	泉藩主	湯長谷藩主	事項
西暦 元号 年	代 姓名 等	代 姓名 等	代 姓名 等	
1756 宝暦 6	9 安藤 信成 のぶひら	7 本多 忠籌 ただかず	5 内藤 政業 まさのぶ	<p>■安藤信成、本多忠籌、幕閣に列する</p>
1761 宝暦 11	美濃国加納→平(5万石)	(1万5千⇒2万石)	6 内藤 貞幹 さだよし	
1778 安永 7	・奏者番 ・寺社奉行 ・若年寄 ・老中(1793/寛政5)	・若年寄 ・側用人	和歌山藩主紀伊大納言宗直6男 ・大坂青屋口加番	
1787 天明 7		・老中(1790/寛政2)	7 内藤 政広 まさひろ	
1799 寛政 11		8 本多 忠誠 ただしげ	8 内藤 政偏 まさゆき	
1810 文化 7	10 安藤 信馨 のぶきよ		6代貞幹6男・7代政広弟 ・大坂青屋口加番	
1812 文化 9	11 安藤 信義 のぶよし		9 内藤 政環 まさあきら	
1815 文化 12	2代信馨甥 信成長男信厚子 ・奏者番	9 本多 忠知 ただとも	唐津藩主水野忠鼎5男 ・大坂青屋口加番	
1824 文政 7			10 内藤 政民 まさたみ	
1829 文政 12	12 安藤 信由 のぶより		庄内藩主酒井忠徳5男	
1836 天保 7	・奏者番	10 本多 忠徳 ただのり	11 内藤 政恒 まさつね	
1843 天保 14		・奏者番 ・若年寄	松平丹波守光庸4男	
1847 弘化 4	13 安藤 信正 のぶまさ		12 内藤 政敏 まさとし	
1860 万延 1	・奏者番 ・寺社奉行 ・若年寄 ・老中(1860/万延1)	11 本多 忠紀 ただとし	内藤鉉之丞政人子	
1862 文久 2	14 安藤 信民 のぶたみ	4代忠知次男 5代忠徳弟 ・奏者番兼寺社奉行 ・若年寄		
1863 文久 3	15 安藤 信勇 のぶたけ		13 内藤 政養 まさやす	
1868 明治 1	岩村田藩主内藤正誠(まさのぶ)弟	12 本多 忠伸 ただのぶ	11代政恒子(1万4千石)	
1869 明治 2		(1万8千石)	14 内藤 政憲 まさのり	
1871 明治 4		7月、廃藩置県	公家・大炊御門家孝子	

■1862/文久2. 1.15平藩主安藤信正、坂下門で襲撃される(坂下門外の変)→4.11老中を免される

■1869.2 版籍奉還により各藩知事となる

※参考資料:「藩史大事典」雄山閣出版、「いわき市史第2巻近世」、「新しいいわきの歴史」

藩主一覽(年齢、生没・就任・退任・在任年数)

平藩・泉藩

平藩主									
藩代	家代	姓名	生	没	年齢	就任	退任	年齢	在任年
1	1	鳥居 忠政	1566	永禄9.	62	1602	慶長7.6.14	36	20
			1628	寛永5.9.5		1622	元和8.9.26	56	
2	1	内藤 政長	1568	永禄11.3.	66	1622	元和8.9.28	54	12
			1634	寛永11.10.17		1634	寛永11.10.17	66	
3	2	内藤 忠興	1592	文禄1.2.1	82	1634	寛永11.10.28	42	36
			1674	延宝2.10.13		1670	寛文10.12.3	78	
4	3	内藤 義概	1619	元和5.9.15	66	1670	寛文10.12.3	51	15
			1685	貞享2.9.19		1685	貞享2.9.13	66	
5	4	内藤 義孝	1669	寛文9.9.24	43	1685	貞享2.11.18	16	27
			1712	正徳2.12.10		1712	正徳2.12.10	43	
6	5	内藤 義稠	1699	元禄12.9.16	18	1712	正徳2.12.27	13	5
			1718	享保3.5.29		1718	享保3.5.29	18	
7	6	内藤 政樹	1706	宝永3.10.29	60	1718	享保3.7.21	12	29
			1766	明和3.9.24		1747	延享4.3.19	41	
8	1	井上 正経	1725	享保10.	41	1747	延享4.3.19	22	9
			1766	明和3.5.31		1756	宝暦6.5.7	31	
9	1	安藤 信成	1743	寛保3.2.23	67	1756	宝暦6.5.21	13	54
			1810	文化7.2.14		1810	文化7.2.14	67	
10	2	安藤 信馨	1768	明和5.10.27	44	1810	文化7.7.9	42	2
			1812	文化9.11.6		1812	文化9.11.6	44	
11	3	安藤 信義	1785	天明5.9.4	58	1812	文化9.12.27	27	17
			1843	天保14.12.25		1829	文政12.7.5	44	
12	4	安藤 信由	1806	文化3.10.12	41	1829	文政12.7.6	23	18
			1847	弘化4.6.5		1847	弘化4.6.5	41	
泉藩主									
藩代	家代	姓名	生	没	年齢	就任	退任	年齢	在任年
13	5	安藤 信正	1819	文政2.11.25	52	1847	弘化4.8.2	28	15
			1871	明治4.10.8		1862	文久2.8.16	43	
14	6	安藤 信民	1859	安政6.10.16	4	1862	文久2.8.16	3	1
			1863	文久3.8.10		1863	文久3.8.10	4	
15	7	安藤 信勇	1849	嘉永2.10.10	59	1863	文久3.10.2	14	8
			1908	明治41.5.24		1871	明治4.7.14	22	
1	1	内藤 政晴	1626	寛永3.	19	1634	寛永11.10.28	8	11
			1645	正保2.8.6		1645	正保2.8.6	19	
2	2	内藤 政親	1645	正保2.	51	1646	正保3.2.28	1	50
			1696	元禄9.11.6		1696	元禄9.11.6	51	
3	3	内藤 政森	1683	天和3.	55	1696	元禄9.12.27	13	6
			1738	元文3.5.12		1702	元禄15.7.4	19	
4	1	板倉 重同	1679	延宝7.	38	1702	元禄15.7.4	23	15
			1717	享保2.6.9		1717	享保2.6.9	38	
5	2	板倉 勝清	1706	宝永3.	74	1717	享保2.8.3	11	29
			1780	安永9.6.28		1746	延享3.9.25	40	
6	1	本多 忠如	1712	正徳2.	61	1746	延享3.9.25	34	8
			1773	安永2.10.15		1754	宝暦4.8.29	42	
7	2	本多 忠籌	1739	元文4.12.	73	1754	宝暦4.8.29	15	45
			1812	文化9.12.15		1799	寛政11.11.23	60	
8	3	本多 忠誠	1761	宝暦11.1.	71	1799	寛政11.11.23	38	16
			1832	天保3.3.8		1815	文化12.7.5	54	

藩主の家（内藤家・安藤家・本多家・土方家）

内藤家（平藩）

内藤家は古くからの徳川家の家臣で、慶長5年（1600）、家康の上杉討伐に畿内の守りとして伏見城を任された伏見城の戦いで、鳥居元忠（初代平藩主の父）らとともに内藤政長父・家長とその弟元長は討死した。この家長・元長兄弟の功績は内藤家が譜代大名として成長する重要な基礎となり、政長長子・忠興（2代）も大坂冬の陣・夏の陣で数々の戦功をたてた。

初代・政長 平藩の築城をした鳥居忠政の後、7万石の所領で入部。忠興も2万石を与えられる。鳥居氏時代から行われていた新田開発や、防風・防潮林の植林に力を注ぎ、現在も政長の法名をつけた「道山林」が残る。

2代・忠興 領内総検地を開始する。寛永5年・寅年頃の総検地は「寛永寅の縄」といわれている。小川江の開鑿や「家中法度」「諸代官郷中取扱之定」「郷中御壁書」の3種からなる「壁書」と称する平藩最初の成文法を制定した。家臣の給分を地方知行制から禄米制へと切り替えた。大坂城代を勤める。妻の天光院は武田信玄の孫娘といわれ、気性の強い女性であったと伝えられる。

3代・義概（義泰） 忠興長子。早くから和歌・俳諧に傾倒して「風虎」と号し、「左京大夫



松賀氏に捕えられた浅香十郎左衛門の墓がある安養寺（平下平窪）

義泰家集」や「夜の錦」、「桜川」、「信太ノ浮島」など多くの著作がある。奥羽俳壇の指導者であり、5人扶持を給していた箏曲の八橋検校の曲に作詞をするなどの教養人でもあった。領地支配は松賀族之助をとりたてて一切を委ね、新参の松賀氏と譜代の家臣たちとの対立による小姓騒動などで藩は混乱した。松賀氏は3代にわたり藩政を専断した。

4代・義孝 義概の後継者とされていた次男義英（露沾）が退隠し3男義孝が家督を相続。義概と義孝は文芸や芸術に親しんだ。地誌「磐城風土記」の編さんが行われ、神社・仏閣の復興や再建、寄進や修理なども行なった。

5代・義頼 義孝次男。13歳で相続し18歳で死去。

6代・政樹 義英（露沾）長男。たび重なる天災での減収に、江戸屋敷と平城下の火災、神社造営、日光東照宮・渡良瀬川改修御手伝普請などが藩財政を圧迫していった。過酷な増税は農民を疲弊させ、元文3年（1738）6月、年貢・諸役減免要求の全藩一揆が起こった。一揆の参加者は8万7千人ともいわれ、藩体制を根底から揺るがした。9年後の延享4年（1747）3月、内藤家は日向国延岡へ移封となった。

延岡内藤家 延岡での内藤家領は7万石あったが、3ヶ所に分散された所領で、慢性的な財政難に陥り百姓一揆が頻発した。政樹の後7代すべて養子相続となる。内藤家は好学の藩主が多く蔵書家としても著名であり、政樹は算学や俳諧にも通じ、延岡俳諧が盛んになる基礎を作った。

内藤家(湯長谷藩)

初代・遠山政亮 とおやままさすけ 内藤忠興(平内藤家2代)の3男。平藩新田分1万石を分与されて湯長谷藩主となった。丑年生まれは、兄に対して宜しくないとの進言により遠山姓を授けられ、後には1万5千石を領した。4代将軍家綱の薨去の際、増上寺仏事勤番中に同役の鳥羽藩主内藤忠勝が乱心して同役永井尚長を斬る事件で、忠勝を捕らえ功をたてた。『土芥寇讎記』には、「うまれつき悠にして行跡よし、家臣をたすけ育て、奢ることをしない。誉れの将なり。美少人を愛す。」と記されている。

2代・政徳 まさのり 堀主計頭直行2男。

3代・内藤政貞 まさただ 窪田藩主土方雄隆の甥(旗本雄賀2男)。姓を内藤氏に戻す。

4代・政醇 まさあつ 政貞の子。湯長谷藩法「郷村掟書69ヶ条」を布令。平藩で起きた「元文3年の百姓一揆」に籠城する平藩士のために米100俵を送った。江戸城詰番部屋を帝鑑間詰に復す願いを出した。8歳で藩主となり27歳で湯長谷に死去。龍勝寺(常磐白鳥町)に葬られる。

5代・政業 まさのぶ 政醇の子。本家の平藩内藤家は政樹が延岡に移封となり、磐城で3藩に分立した内藤家は湯長谷藩が残るのみとなった。政業は1歳で家督を継ぎ20歳で隠居、文化8年(1811)江戸にて死去。年71歳。

6代・貞幹 さだよし 和歌山藩主徳川宗直6男。日光祭礼奉行を2度、大坂青屋口加番を3度勤めた。

7代・政広 まさひろ 貞幹の子。17歳で早世。

8代・政偏 まさゆき 貞幹6男。14歳で家督を相続し、日光祭礼奉行や大坂青屋口加番を勤め、26歳で死去。

9代・政環 まさあきら 肥前唐津藩主水野忠鼎5男。日光祭礼奉行を勤める。

10代・政民 まさたみ 荘内(鶴岡)藩主酒井忠徳5男。大坂青屋口加番を命ぜられ、中仙道を経て大坂へ赴いたときの紀行文「木曾のしほり」がある。隠居後に藩校「致道館」を開く。

11代・政恒 まさつね 松平丹波守光庸4男。

12代・政敏 まさとし 内藤鉉之丞政人の子。

13代・政養 まさやす 11代政恒の子。戊辰戦争で平藩、泉藩とともに奥羽越列藩同盟に加わる。領地1千石を召上げられ謹慎、隠居。墓所は4代政醇とともに龍勝寺。

14代・政憲 まさのり 公家・大炊御門家孝の子。当初は谷大膳衛滋の養子となっていたが政養の謹慎退隠のため養嗣子となった。湯長谷藩知事となり、廃藩置県をむかえた。

湯長谷藩内藤家は14代、200余年間に養嗣子が8代あり、国替えがなく明治維新をむかえた。領内の江名・豊間村ではカツオとイワシの漁が主流でカツオ節が生産され、ウキキ(マンボウの腸)の粕漬は将軍家へも献上された。



4代藩主政醇の墓
(常磐白鳥町・龍勝寺)

安藤家(平藩)

初代・信成 ^{のぶひら} 宝暦6年(1756)5月、美濃国加納藩主安藤信成が父信尹の不行跡の科により1万5千石を減封されて5万石で入部する。奏者番、寺社奉行、若年寄と昇進し、寛政5年(1793)8月老中となる。藩校「施政堂」(のち祐賢堂)を八幡小路に創設した。

2代・信馨 ^{のぶきよ} 産児制限の悪習に心を痛めその矯正に努めたが、その治政わずか2年。

3代・信義 ^{のぶよし} 信馨甥(兄信厚の子)。奏者番となり、病のために辞して隠居する。

4代・信由 ^{のぶより} 信馨5男。奏者番となる。江戸城西丸普請御手伝は凶作続きの藩財政を一層窮迫した。

5代・信正 ^{のぶまさ} 安藤家は移封当時すでに70万両の債務があり、その後も減ずることなく藩財政改革が急務となっていた。家臣の人員整理をした「一藩面扶持の制」、俸禄の借上げや藩主・奥向をはじめ諸役の経費節減をはかった「積替仕法」、



松ヶ丘公園に立つ安藤信正像

「復元主法」と称する講をはじめた。また、奏者番、寺社奉行に進んだが、幕府要職への就任は藩財政の大きな負担となった。若年寄、さらに老中に進み、井伊直弼が暗殺された「桜田門外の変」を対処し、孝明天皇妹和宮の将軍家茂降嫁を果たした。プロシアとの修好条約締結、英国仮公使館東禅寺襲撃事件、遣米使節派遣や国境問題など多くの外交問題に取り組んだ。文久2年(1862)1月15日、登城

途中に坂下門外で襲撃され負傷した(坂下門の変)。後に老中在任中の失政を理由に隠居謹慎を命ぜられ、2万石削封、永蟄居の追罰をうけたが慶応2年(1866)赦された。

6代・信民 ^{のぶたみ} 信正長男。3歳で家督を継ぎ4歳で夭折。

7代・信勇 ^{のぶたけ} 岩村田藩主内藤正誠弟。戊辰戦争で信正は平城で奥羽越列藩同盟に加わり政府軍に対抗したが、平城が落ち、仙台に逃れ、再び東京で永蟄居を命ぜられた。美濃分領切通陣屋にいた藩主信勇は、陸中国磐井郡3万4千石へ転封、平藩へは庄内藩主酒井徳之助の入封が予定されていた。

信勇は転封の取り消しを嘆願し7万両の献金(庄内藩は70万両献金)で復帰した。永蟄居をゆるされた信正は明治4年(1871)、波乱にみちた52歳の生涯を東京で終えた。藩主信勇は平藩知事となり廃藩置県にいたった。

本多家(泉藩)

初代・忠如 ^{ただゆき} 延享3年(1746)9月、遠江国(静岡県)相良から1万5千石で入封。大坂加番を命ぜられ、後に病のため隠居。

2代・忠籌 ^{ただかず} 藩財政は窮乏の極に達し、大坂加番の役を自ら願い出て役高1万石によって藩財政を助けようとした。質素儉約を奨励し、藩財政の再建に力を注いだ。凶作や飢饉に備えて貯穀を命じ、各村に郷倉を創建させ、天明の飢饉では夫食金や種籾などを援助した。

小児養育の扶助、越後からの奉公人の受け入れや移住をすすめ農業生産力の増強をはかった。また、心学講舎「善教舎」を設立し庶民教化を進めた。若年寄、側用人、老中格となり加増されて2万石となり松平定信の「寛政の改革」に参画した。隠居後に荷路夫(田人町)への紀行文「こそこの枝折」がある。



本多忠篤にちなむ「赤玉本多」の碑
(泉西公園)

3代・忠誠。 4代・忠知。

5代・忠徳 奏者番、若年寄となる。武蔵・下総・安房の海岸巡検を命ぜられて海防に関心をもち、江川太郎左衛門に砲術を学んだ。家臣にも江戸の講武所や伊豆の菫山塾で砲術を修練させた。藩校を創立し忠徳の書齋名から「汲深館」と命名する。若年寄在任中に没した。

6代・忠紀 奏者番兼寺社奉行、若年寄となる。奥羽越列藩同盟に加わり、敗れて2千石を減封。

7代・忠伸 明治元年12月(1868)、1万8千石を相続。

同2年(1869)藩籍奉還により泉藩知事となり、同4年(1871)廃藩置県を迎えた。

土方家(窪田藩)

初代・雄重 土方雄重は將軍秀忠の御小姓となり、大阪冬・夏の陣には酒井忠世の組で従軍した。内藤政長の女婿で政長・忠興父子とともに磐城に入封した。加賀国野々市(石川県石川郡)の1万石と菊田郡内の1万石を合わせて2万石となり、陣屋を窪田村(勿来町窪田)に移し窪田藩となる。36歳で没す。

2代・雄次 雄重長男。室は内藤忠興2女で、7男2女あり(内忠興女3男子)。五箇村用水や酒井用水を造営し、御宝殿熊野神社修築や菩提寺大高寺本堂再建を援助した。

3代・雄隆 兄雄信は病弱のため嫡子を辞し、弟雄賀に2千石を分知して1万8千石を領した。天和3年(1683)5月、領地の窪田に下向を願い出た雄隆は、弟貞辰を世継とする許しを得たが、国許で藩主兄雄信の子内匠の世嗣再考をせまられ、改めて内匠を世嗣とした。翌年6月、憤激した貞辰は大目付に訴状を呈し、上野寛永寺にこもった。家中騒然となり、窪田に潜居中の雄隆側室・小出御前が射殺されるまでの抗争となった。

同7月、除封廃藩の処置が下され、藩主雄隆は村上藩榊原家へ、貞辰は藤堂佐渡守へ預けとなった。内匠は八丈島へ配流され在島43年、享保11年(1726)病死した。窪田藩土方家は3代62年で廃絶となった。

雄信は磐城に居住し70余歳の長寿を得、その子織部は内藤家家臣となる。雄賀は幕府旗本となり、その所領は大高村・酒井村にあり、旗本土方家は15代を経て明治維新を迎えた。

湯長谷藩主3代・内藤政貞は雄賀次男。



御家騒動の抗争で射殺された藩主雄隆側室・小出御前を祀る「御前崎神社(菊多神社)」
(勿来町窪田)

◇◇◇ 関連(参考)資料 ◇◇◇

- ◆ 『いわき市史 第2巻 近世』 いわき市史編さん委員会 いわき市 1975年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第9巻 近世資料』 いわき市史編さん委員会 いわき市 1972年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『新しいいわきの歴史』 いわき地域学曾出版部 1992年 (K/210.1-1/ア)
- ◆ 『いわきの人物誌 上・下巻』 いわき地域学曾 1992年 (K/281/イ)
- ◆ 『安藤信正の時代 マンガいわきの歴史から』 石山揚子画 いわき市 1999年 (AL/726/イ)
- ◆ 『いわき史料集成 第1～5冊』 いわき史料集成刊行会 1992年 (AL/210.0-1/イ)
- ◆ 『藩史大事典 第1～8巻』 雄山閣出版 1988年 (R/210.5/ハ-1～8)
- ◆ 『武者たちの舞台 上・下巻』 福島民報社 2007年 (K/210.1-1・2/イ)
- ◆ 『いわき市勿来地区地域史1』 いわき市勿来地区地域史編さん委員会
2012年 (AL/210.1-1/イ-1)
- ◆ 『湯長谷藩のしおり』 小野佳秀著 湯長谷藩館址建碑協賛会 1975年 (AL/210.5-1/オ)
- ◆ 『平の殿さま 蘇るいわきの歴史』 いわき平東ロータリークラブ 2006年 (AL/210.1-1/イ)
- ◆ 『日本史総覧IV近世1』 新人物往来社 1984年 (R210.0/ニ/4)
- ◆ 『藩史事典』 藩史研究会編著 秋田書店 1976年 (R/210.5/ハ)
- ◆ 『藩と城下町の事典』 東京堂出版 2004年 (R/210.5/ハ)
- ◆ 『譜代藩の研究 譜代内藤藩の藩政と藩領』 明治大学内藤家文書研究会編 八木書店
1972年 (AL/210.5-1/フ)
- ◆ 『坂下門外の変』 斉藤伊知郎著 算修堂出版 1982年 (AL/210.5-1/サ)
- ◆ 『磐城平藩政史』 鈴木光四郎著 磐城平藩政史刊行会 1980年 (AL/210.5-1/ス)
- ◆ 『海の国 安藤対馬守信睦の生涯』 武田八洲満著 文藝春秋 1976年 (K/289/ア)
- ◆ 『窪田藩の研究』 甲高武雄著 白銀書房 1973年 (AL/210.5-1/コ)
- ◆ 『菩薩の剣 磐城騒動秘話 歴史小説』 沢井一泉著 歴史春秋出版 2000年 (AL/F/サワ)
- ◆ 『超高速 参勤交代』 土橋章宏著 講談社 2013年 (AL/F/ドバ)

